



青土社

赤瀬川原平

科学と抒情

科学と抒情
赤瀬川原平



科学と抒情

© 1989, Genpei Akasegawa

1989年3月1日 第1刷印刷

1989年3月15日 第1刷発行

著者——赤瀬川原平

装幀者——東 幸見

発行者——清水康雄

発行所——青土社

東京都千代田区神田神保町1-29 市瀬ビル 〒101

(電話) 291-9831〔編集〕, 294-7829〔営業〕

(振替) 東京9-192955

印刷所——三協美術印刷

製本所——小泉製本

0070-400343-3978 Printed in Japan

科学と抒情
目次

三原山大噴火の責任 7

いまは冬 21

空虚に沿って物質は分布する 31

財テクという経済の超能力 45

桜散る 59

エイズ世代のベロドーム 65

朝早くウズラが文学散歩をしているという噂の山道 77

ご褒美の夏 91

夏のつづき 99

助走のあとの踏み切り 107

経済のマニエリスム 121

上海から半蔵門 135

地上げ屋は自然の発露 143

正月の空気を食べる 157

陰に収められた垂直交通 165

眼も大変だが、歯も大変 179

お花見の冷凍保存 191

トマソンからの逸脱 205

人間は天才を生んで凡才を育てる 213

超芸術の超を切り取る話 227

世界の重みが顔面に作用する 239

麦芽百パーセントのニコンF4 253

偶然の海に浮く反偶然の固まり 267

科学と運動 281

科学と抒情

三原山大噴火の責任

去年の夏は大島へ旅行した。たった一泊だけど、くさやの取材旅行だ。くさは新島が有名だけど、大島でも作っている。

美学校の生徒に大島の酒屋の息子のT君がいるので案内してもらった。酒屋といっても造り酒屋で、造り酒屋といっても焼酎である。

南国の鹿児島は焼酎しか造っていない。大島も焼酎を造っているのが南国だな、と思った。

「御神火」という焼酎で、ネーミングはじつに焼酎らしくていい。御神火というのは大島のシンボル三原山の噴火する火のことである。酒蔵は大島では一つだけらしい。

ところで大島といえば椿油が有名だが、大島つむぎというのもよく聞く。家人にもそのことを言われて、お土産に、などとせがまれたりした。私も馬鹿だから行ったときそれとなく大島つむぎを探したのだけど、それらしい店はどこにもない。つむぎなんて売っている気配もない。おかしいのでT君

に訊いてみると、

「あれは奄美大島ですよ」

と言われた。鹿児島県の奄美大島である。大島といってもいろいろあるのだ。恥をかいてしまった。帰ってから、大島つむぎは奄美大島だよ、と家人に自慢げに言うのと、こんどは家人が恥をかいていた。

でその大島、伊豆七島の大島へ行ったのだけど、プロペラ機にはじめて乗った。使い込んだジュラルミンの膚が大型の模型飛行機みたいで、落ちないだろう、とムリヤリ思ったら、本当に落ちなかった。

でT君に案内されてくさや製造所の取材をしたのだけど、その前に三原山を見に行った。四輪駆動のワンボックスカーに乗せてもらって裏砂漠というところをゴンゴンと弾ねながら、ちよつとしたサファリ気分で外輪山を越え、内輪のそばの展望台まで行った。そこから先は立入禁止の札があったが、とくに監視の人もないので内輪の崖のところまで行ってみた。地面はガサガサの熔岩がつづいて、ウイスキーのポケット瓶が埋まっているのを見つけたりした。自殺者が飛び込む前に飲んだのかも知れない。

T君の話によると、自殺者はだいたい立入禁止の札の辺りでじっとしゃがんでいるという。そして

いざというとき立ち上がって、噴火口まで走るそうだ。その勢いで一気に飛び込むらしい。延べ三千人は飛び込んでいるという。

内輪の崖のところまで行って下を覗いてみたが、火口の底はまだ見えない。下にまたいくつかの崖がつづいているのだ。だから自殺者はよく途中で引つかかるらしい。そうなると無視するわけにもいかないわけで、地元の警察や消防が苦勞する。だから自殺未遂というのはしない方がいい。

さすがに内輪までくると、岩の隙間から湯気が吹いていたりする。地面も少し熱い。

T君によると、火口が見えたとしても下には地面が出来ているという。いまは赤いものは見えないらしい。それでもときによって、夜中に火口の上の空がほんのり赤くなるのが、下の町から見えるという。それもしか شایدいぶ昔のころのようだ。

向かい側に見える噴火口の内壁は、すすけたような模様がさすがに無気味だった。三千人の自殺者のことを聞いているせいか、その岩の凹凸やすすけた模様に、いくつもの人面が重なってあらわれてくる。

「ピーッ！」

と笛の音がした。遠くに白いヘルメットが見える。T君は警察だと言う。近づいてくるのを見ると、首から大きな双眼鏡をぶら下げている。やはり遠くから監視していたのだ。私たちの素振りからして、

自殺者とは思わなかっただろうが、それにしても近づきすぎて、挙動不審となったのだ。

目の前に来て警告を受けた。別に住居不法侵入とかの罪ではないが、やはり常識で考えて、良いおこないではないのはわかる。

「すみません」

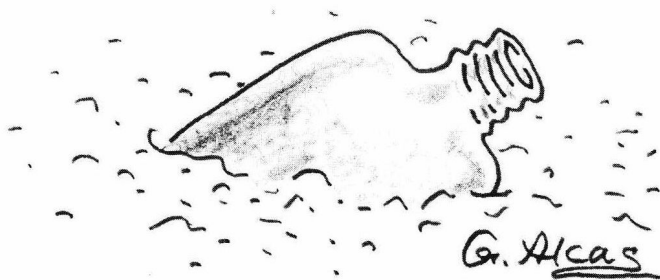
「ごめんなさい」

とか言って火口を離れた。

で、くさや製造所を訪ねて取材したあとT君の案内で島の料理屋に行き、ピンピンの魚の刺身を肴に焼酎を飲んで満足して帰ったのだけど、帰った次の日、新聞を見ると、

「三原山」

という活字が目に入った。一段組の小さな記事で、大島の観測所からの報告によると、何年振りかで三原山の火山活動がわずかに観測されたという。何らかの計測器に針の揺れがあったらしい。それが八月の十二日。私たちが火口に近づいた明るる日である。



「まさか俺たちが刺激したんじゃないだろうね」

と言ってT君と笑った。

ところがそんなことも忘れていた十一月の十五日、三原山が本当に噴火したので、おっ、と思った。おいおい、本当に噴火したよ、こりやもう一度見に行きたいな、と思っていたが、これは収まった。そうしたら六日後の二十一日、例の大噴火である。

はじめラジオを聴いていた。

「……ところで気になる大島の三原山の噴火ですが、その後どうなったでしょうか。情報が入りしいお知らせします……」

などと言っている。何か変な気がした。十五日に噴火したあとはもう収まっているのに、おかしいな、と思っていると、七時ごろT君から電話があつて、大島が危なくなつて親父が一人なので、もう荷物をまとめはじめたというから、ちよつと行つてくるという。驚いていると、

「もうテレビにぼんぼん映ってますよ。見るといいですよ」

と言われた。

「しかし船は出るの」

と訊き返すと、観光客はすでにオフリミット、島の者だけ乗せる船が出るという。T君はニヨンF

3を持っているから、シャッターチャンスに燃えるだろうが、まあしかし気をつけて、と言って電話を切った。そのあと、しかしいったいどんな具合かとテレビをつけると、もう大変だった。まるで知らずにいたのだ。真つ赤なものがどんどん噴き出している。この世のものとは思えなかった。という古めかしい言葉がかまわず出てきて、驚いて口を開けて見入りながら、そのまま明くる日の四時までずーっとみていた。

*

最近「路上観察学」というものをやっている。なぜカッコよくったかというところ、おそらくまだ世間的には学問として認知されてないと思うからだ。

そうはいっても、もう路上観察学会というものが出来てしまっている。去年の六月、神田の学士会館で発会式をした。十数人の会員がみんなモーニングを着た上に愛機のカメラをぶら下げて記念写真を撮った。記者団がたくさん来て、スライドで学会報告もした。もう出来てしまったものはしょうがない。

路上観察学についてはすでに関連図書がいくつか出版されているので、解説はそちらにゆだねる。で、そのような路上観察学であるが、問題はこの学に世間の関心が集まっている、ということであ

る。なぜこんな役にも立たない路上観察学に、世間の目が向いてしまうのか。

しかしそのことを当の私が言うのは、ちょっとそれはひとりよがりというか、あなた、ウヌボレもはなはだしいですよ、とかいろいろありうるが、もうそういうことはどうでもいいことにしよう。

この間、錦糸町にオープンした西武デパートの一隅で、路上観察学会の最初の展覧会が開かれた。それまですでに電波活字メディアで報道解説されていたこともあるが、人がたくさん来たので驚いた。会場が狭かったこともあるが、若い人がぎっしり。女性も多い。

路上観察学というのとはもともと冗談からはじまったことで、見た感じ恰好いいことではないので、若い女性には振り向かれませぬね、という一般論があった。ところが現実には若い女性がたくさん来ってしまうのだから、一般論は浅い顔をしている。

路上観察学というのとはみずからを見る学問である。路上観察学の本質である「考現学」というのが、そもそもみずからを見る学問として出発している。昭和のはじめの、極東の島日本ならではのオリジナルの快挙である。

みずからを見る、というのは私の勝手な言い方だけど、それまでの学問は他人を見ることだった。

医学は他人の体を見ることであり、天文学とは他の天体を見ることであり、生物学とは他の生物を見ることである。民俗学とは自分とはかけ離れた村の生活を見ることであり、考古学は自分とかけ離れ